

ソーシャルワーク実践へのエコスキャナー開発の研究 — 支援ツールを用いたスキル訓練の方法 —

太田 義弘^{*1} 野澤 正子^{*2}

中村 佐織^{*3} 阪口 春彦^{*4}

(研究協力者) 長澤 真由子^{*5} 西梅 幸治^{*6} 山口 真里^{*7}

Research for the Development of Ecoscanner in Social Work Practice Skill Training Methods in Social Work by Using a Micro Computer

Yoshihiro Ohta^{*1}, Masako Nozawa^{*2}, Saori Nakamura^{*3}, Haruhiko Sakaguchi^{*4},
Mayuko Nagasawa^{*5}, Kouji Nishiume^{*6} and Mari Yamaguchi^{*7}

Social work is the scientific and professional activities and method to solve problems of clients and to enhance their self-realization in daily lives. In order to achieve such objectives, we have continued to do our research and have built an idea called "Ecosystem Project" which serves as a bridge (a middle range conception) in connecting and constructing theory and practice. Therefore, Ecosystem Project can be considered to be not only an idea but also a practical method.

This research helps in understanding and enhancing the real life of clients using Ecosystem Project by summarizing the own life world (cosmos) of clients on the chart made visual. Using Ecosystem Project, social workers who are participating and collaborating in the process of life enhancement with clients, can carry out assessments based on the processing information.

The purpose of this research reported in this article was to develop and use a micro computer called "Ecoscanner," which works to solve problems and enhance client's self-realization in the field of social work practice.

The contents of this article are as follow:

- ① Introduction and progress of research
- ② Subjects of social work practice
- ③ Ecoscanner as a life enhancement tool
- ④ The characteristics of Ecoscanner
- ⑤ The result of using Ecoscanner
- ⑥ Conclusion and future

*1 元社会学部教授・大阪府立大学名誉教授・関西福祉科学大学大学院教授

*2 元社会学部教授・大阪府立大学名誉教授

*3 元社会学部非常勤講師・京都府立大学助教授

*4 龍谷大学短期大学部

*5 研究協力者・龍谷大学大学院社会学研究科研究生

*6 研究協力者・京都府立大学大学院博士後期課程学生

*7 研究協力者・京都府立大学大学院博士後期課程学生

I はじめに

本研究の発端と背景は、米国でソーシャルワーク教育と実践研究に参加する機会を与えられたことにあり、そこで新鮮な刺激を得て1977年に帰国し、ソーシャルワーク実践過程研究に着手して以来のことである。

ソーシャルワーク実践研究とは、研究者側の興味や関心あるいは研究方法に中心があるのではなく、その目的や焦点は、何よりも利用者の課題解決と自己実現ということ以外にあってはならない。それは利用者自身の成長や変容あるいは環境を含む諸状況の改善や発展そのものでなければならない。

それは、また利用者の生活支援という人と環境から構成される現実に迫るため、生活そのものを掘り下げるとともに、その流れに対応した支援の過程を深めていくことにある。利用者を中心にしながら、われわれが果たせる役割は、支援過程の科学的な考察と推進ということになる。したがって、ソーシャルワーク実践研究とは、過程研究以外に方法はないとの認識のもとに、継続研究を二十数年にわたって積み上げてきた。その経緯や成果を、ここに簡単にまとめておくと、

I 基礎理論研究 - ①実践研究の前提と基礎、②実践研究の枠組み

II 方法過程研究 - ③支援科学としてのソーシャルワーク研究、④実践過程研究

III 実践展開研究 - ⑤エコシステム構想の研究、⑥支援ツールの展開研究

とに、整理できる。

これらの研究経過を経て、1998年から実践過程研究に共通な関心をもつ教育研究者や大学院生と民間企業のコンピュータの専門家がエコシステム研究会を発足させてきた。やがてソーシャルワーク実践におけるコンピュータ支援ツールの開発と、それを活用した支援展開方法に関する研究へと発展し、龍谷大学国際文化研究所の共同研究費や科学研究費補助金などの支援を得て各種の研究を遂行し、学会での研究発表やシンポジウム、ワークショップや学術論文、さらに著作などに成果を発表してきた。

特に今回の本報告は、その一環として開発してきた多目的支援ツール「エコスキャナー」のなかでも、ソーシャルワークの支援スキルの実践訓練を目的としたコンピュータ教育支援ツールの開発と、それをを用いた演習訓練を現場のソーシャルワーカーや大学院生さらに学部学生に対して行った実証研究である。

II ソーシャルワーク実践の課題

わが国の社会福祉をめぐる状況は、時代とともに変革をしてきた。その変遷は、国家社会による社会福祉施策の整備や拡充としてのハード福祉を中心にした動向から、利用者の立場で社会福祉を生活のなかに具体化する実践活動や方法としてのソフト福祉を重視した方向へと移行してきた。今日では、そのための施策としての枠組みも整備され、理論や制度から実践や方法へ、あるいは量や形式から質や内容へと、発想や視点が急速に転換してきている。

教育・研究者や社会福祉行政の担当者はもちろんのこと、広く人々の社会福祉への関心も、この方向へと理解が浸透し始めてきた。しかし、また社会福祉の実践動向は、これらの期待に応えられるだけの進歩や発展を遂げてきてはおらず、一大課題となってきた。この社会福祉の実践課題

を担うのがソーシャルワークであるが、実践の現場は玉石混交で、緻密な理論や方法に基づく実践的試行が進行する一方で、勘と経験のみに依拠した社会福祉サービスの給付に明け暮れている現実も否定できない。

今まさにソーシャルワークの視野や発想がもつ意義とソーシャルワーカーの存在と役割が厳しく問われている。それはソーシャルワーク実践の科学化や専門化が、焦眉の急を要する課題となってきたからである。そこで利用者の社会生活への支援と、利用者とソーシャルワーカーとの参加と協働からなる支援過程という方法の追究を通じて、時代の要請に応えようとするものである。

この喫緊の課題にチャレンジしようというアイデアがエコシステム構想である。それは生活支援過程と呼称できる視野・原理・方法を包括・統合化した実践行動概念ということになるが、この構想には、ソーシャルワークを代表する三大固有概念が内包されている。それは、①生活概念、②支援概念、③過程概念とである。生活概念とは、ソーシャルワークがかかわる利用者の固有な生活コスモスという世界を対象にした特有の実体概念である。支援概念とは、利用者中心の支援を利用者のもつ自己統制力ともいえる社会的自律性の支援を参加と協働のもとに実現しようとする固有な方法概念である。そして、過程概念とは、支援を科学的方法として積み上げていく独特な流れからなる価値実現への実践概念である。

これらの概念を包括・統合化したエコシステム構想は、次のような目標の実現を目指したものである。

- (1) 理論と実践の包括・統合化への具体的方法を提示
- (2) 利用者理解としての生活コスモスの実体的把握への方法
- (3) 支援過程展開としての参加と協働の方法への志向
- (4) コンピュータ・シミュレーションによる生活支援への最適化した情報の提供
- (5) ソーシャルワーカーの生活支援スキルの訓練方法を支援
- (6) ソーシャルワーク実践方法の科学化への試行

などの具体化と実現を目指したものである。

これらは、エコシステム構想の目標であると同時に、社会福祉の新しいパラダイムが展望されるなか、これからのソーシャルワーク実践に期待される課題でもある。またさらに、ソーシャルワーク実践の閉塞状況に、新しい息吹を鼓舞しようという願いでもある。すでに、これらのアイデアや理論、実践や方法については、詳述してきているので文献²⁾を参照願えば幸いである。

一言付言をしておくと、これらの目標は、支援ツールとしてのエコスキャナーの併用を大前提として実現するものである。したがって、(1)の理論と実践の統合化は、理論をプログラム化したソフトを実践場面で併用することで可能になるものである。(2)も利用者の生活コスモスを詳細な生活のエコシステム情報として収集し、シミュレーションから生活の実体に迫ることを目指している。(3)は、それらの処理情報を介して利用者とソーシャルワーカーとがコミュニケーションを深め、参加と協働という支援過程から利用者の実存に迫ろうとしている。

さらに(4)は、そのために周到に計画されたシミュレーション・ソフトが必要である。見えない生活コスモスをビジュアル化して、課題解決や自己実現をとともに模索できる土俵を提供すること、ここにコンピュータを活用することの大きな意味がある。(5)は、それらの処理情報を介して相互理解を深め、生活のエコシステム状況の生成や生態を把握し、支援の推進方法を訓練しようとする考え

である。そして、(6)に支援ツールという生活コスモスを理論的に網羅できる枠組みと、生活の内容や変容を把握できる情報とをシミュレーションして、生活のエコシステム状況を科学的に把握しようとしている。この支援ツールという科学的な情報処理方法を活用しながら、他方では実存的な人間理解へのコミュニケーションを深めることによって実践過程の推進が図られることになる。

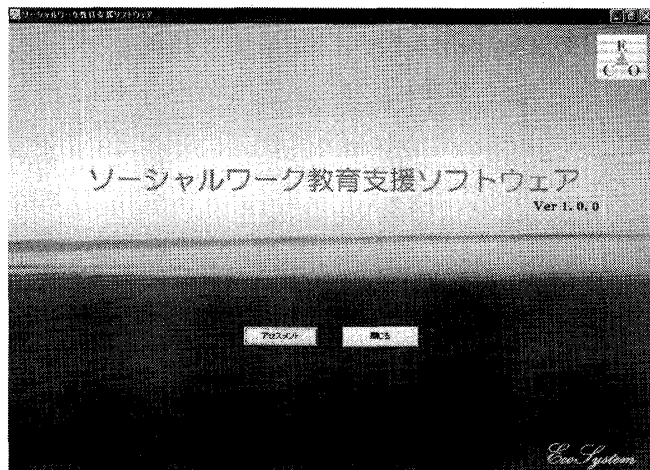


図 1



図 2

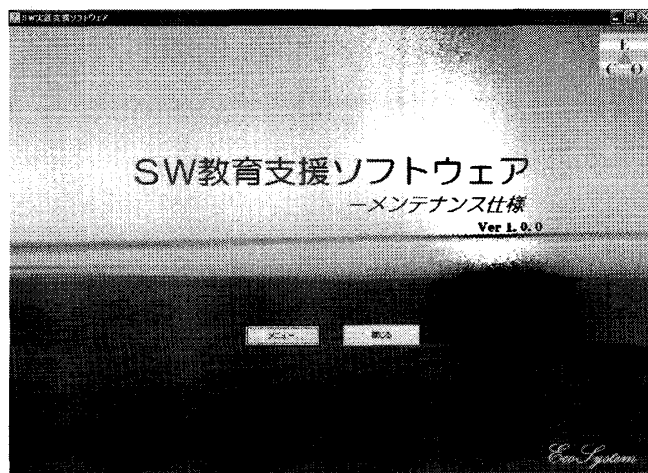


図 3

本報告は、このようなアイデアからなるエコシステム構想を、ソーシャルワークの実践訓練場面で展開してきたことへの考察である。特に、われわれが開発してきたコンピュータ・ソフトであるソーシャルワークへの多目的支援ツール「エコスキャナー Ecoscanner」³⁾には三種あり、図 1 がソーシャルワーク教育支援ソフトウェア、図 2 が SW 実践支援ソフトウェアで、図 3 が SW 教育支援ソフトウェアである。今回のソーシャルワーカーや学生の支援スキル訓練に焦点をあてた支援ツールは、図 1 のソーシャルワーク教育支援ツールで、その開発と活用への実証研究から得られた成果を本論文にまとめたものである。事例を活用した実践訓練から本研究では、①学生や現場のソーシャルワーカーによる支援ツールの使い心地、②支援ツールのシミュレーション体験の評価とトレーニング方法の効果、③実践ツール活用の可能性と課題を参加観察やアンケート結果をつうじて考察したものである。

(太田義弘)

Ⅲ 支援ツールとしてのエコスキャナー

エコシステム構想の実践展開

エコシステム構想は、利用者固有の生活コスモスという実体に迫るため、利用者の生活状況を一つの固有なシステムとしてとらえ、その複雑で独特な広がりを理解しようという発想と方法である。生活を要素や構造、関係や機能から分析し、生活の全体状況を論理的に把握するという考え方であ

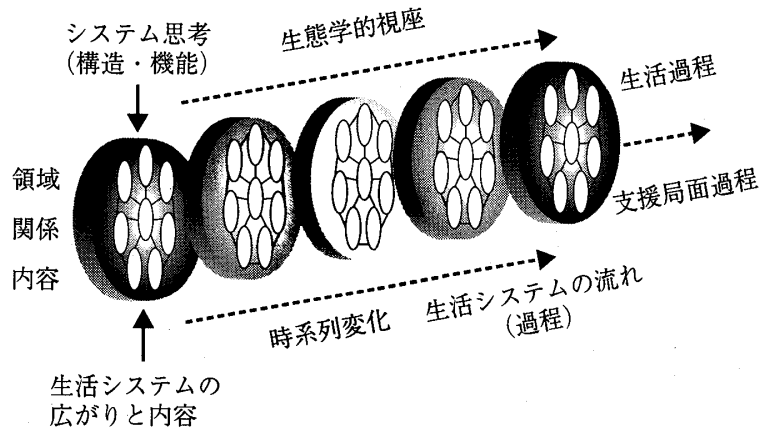


図4 生活のエコシステム理解⁴⁾

る。また生活状況をシステムとしてとらえる一方で、刻々と変化する生活全体の流れを生態学的にとらえるアイデアである。

時間的経過のなかで利用者と取り巻く環境から生活をとらえ、その相互関係から生活全体のバランスが維持されていく過程を把握することである。このように生活状況をシステムとしてとらえ、生活状況の変容過程を生態学的にとらえる視座がエコシステム視座であり、とらえた生活状況をエコシステムと呼んでいる。

生活とは、当の本人にとっては、身近な出来事や状況の堆積からなる具体的な広がりや内容から成り立つ概念であるが、他者からは全く見えない抽象的な世界である。このエコシステムというメタ概念をイメージとして図示すると、図4のようになる。円盤の一つ一つはある時点での生活の広がりや関係さらに内容をシステムとしてとらえたものであり、円盤の連続はある期間における生活の積み上げからなる変容状況を示している。利用者の生活状況を領域と生活を構成する要素の関係、内容からシステムとして分析し、システムとしての生活状況を連続的な流れとしてとらえ、さらに生活の全体状況の変容を生態学的な視座から把握することである。

この利用者の複雑で多様な生活コスモスを理解するための理論を実践的に展開するには、コンピュータ科学の導入が必至であり、その目的に沿うように研究・開発された支援ツールがエコスキャナーである。利用者の生活システムを細かな情報因子に分解して情報を収集し、その情報因子をコンピュータを用いてシミュレーションし、支援に必要な情報へと処理・加工する。そしてその情報を蓄積することによって生活の変容過程を把握しようとするものである。

エコスキャナーの活用と役割

エコスキャナーの原理と構成を具体的に解説すると、まず利用者の生活エコシステムを、詳細な情報から抽出して理解することが目的である。そのために生活を、次のようなシステム階層、①統合的全体性、②領域、③分野、④構成、⑤内容へと順次整理して構造化している。

それらは人間と環境の領域に2分割され、それを当事者・基盤・周辺・支援の4つの分野に4分割することになる。さらに、それらを8構成からなる8つの構成要素に8分割、さらにそれらを32内容からなる32内容構造に細分割して構成している。

32の内容構造に関連する質問を、それぞれ4つずつ設定して、合計128からなる質問でエコスキ

表1 生活エコシステム情報の構成と内容⁵⁾

生活エコシステム情報の構成と内容										
氏 名 _____ 性 別 _____ 年 齢 _____ 職 業 _____										
家族形態 _____ 居住形態 _____ 問題 _____										
生活システム 領域カテゴリー					実践要素の構成 内容情報		1 価 値	2 知 識	3 方 策	4 方 法
全体	領域	分野	構成	内 容	態 度	意 識	現 状	事 実	実 状	取 組
					意 識	意 識	現 状	事 実	実 状	取 組
生 活	1 人 間	I 当事者	[1] 特性	A 個別特性	倫理特性	機能特性	社会特性	行動特性		
				B 自己認識	自己への関心	自己理解	自己改善計画	自己改善努力		
				C 社会認識	社会への関心	社会状況理解	社会参加計画	社会参加努力		
				D 社会的自律性	生きがい意識	目的の具体化	目的達成計画	目標達成度力		
		II 基盤	[2] 問題	A 焦点	問題への関心	問題焦点の実状	焦点への対応策	焦点への取組		
				B 障碍	障碍の自覚	障碍の実状	障碍改善対策	障碍改善努力		
				C 緊急性	緊急性の自覚	緊急性の現状	緊急への対応策	緊急への取組		
				D 程度	問題解決の姿勢	問題解決の現状	問題解決計画	問題解決努力		
	III 周辺	[3] 身辺	A 健康	健康への関心	健康の現状	健康の維持計画	健康の維持努力			
			B 生計	生計への姿勢	生計の現状	生計の維持計画	生計の維持努力			
			C 住居	住居への関心	住居の実状	住居の維持計画	住居の維持努力			
			D 生活拠点	生活拠点の関心	生活拠点の現状	拠点での支援策	拠点での取組			
IV 家族	[4] 家族	A 理解	家族による理解	家族の役割関係	役割改善計画	役割改善の努力				
		B 連帯	家族連帯意識	連帯の現状	連帯の改善策	連帯復元努力				
		C 意欲	家族の支援意識	支援の状況	支援への見通	支援への協力				
		D 社会性	社会への関心	社会との関係	社会参加計画	社会参加努力				
2 環境	III 周辺	[5] 近辺	A 近親	近親の姿勢	近親との関係	近親の支援見通	近親の支援協力			
			B 近隣	近隣の関心	近隣の理解	近隣の支援見通	近隣の支援協力			
			C 友人	友人の関心	友人の理解	友人の支援策	友人の支援協力			
			D ボランティア	V の機運	V の支援状況	V の支援計画	V の参加計画			
	IV 支援	[6] 資源	A 支援施策	支援施策の機運	施策の動向	施策の拡充計画	施策の活用展開			
			B 施設機関	施設機関の姿勢	機関の実状	機関の支援計画	機関の支援方法			
			C 行政	行政の姿勢	行政の現状	行政の推進計画	行政の取組展開			
			D コミュニティ	C の雰囲気	C の実状	C の支援計画	C の参加協力			
IV 支援	[7] 機関	A SWer	SW の支援	SW の活動状況	SW の活動計画	SW の取組				
		B 他職種	他職種の姿勢	他職種活動状況	他職種活動計画	他職種の取組				
		C サービス	機関のSV姿勢	SV の内容	SV の改善計画	SV の展開				
		D アクセス	AC への関心	AC の状況	AC の改善計画	AC の改善努力				
IV 支援	[8] N W	A 私的NW	NW への関心	NW への現状	NW の改善計画	NW の改善努力				
		B ビアNW	NW への関心	NW への現状	NW の改善計画	NW の改善努力				
		C 機関NW	NW への関心	NW への現状	NW の改善計画	NW の改善努力				
		D 地域NW	NW への関心	NW への現状	NW の改善計画	NW の改善努力				

注：情報はすべてソーシャルワーカーが、利用者より聴取し代弁・整理したものである。

ャナーは表1のように構成されている。128構成因子への回答をコンピュータに入力することで利用者の生活システム情報を収集することになる。図5は、入力画面を呼び出すアセスメントシート画面である。その画面から指定した入力項目を選択して呼び出した画面が図6で、情報を入力するインタークシートである。そして収集された情報をコンピュータで処理しビジュアル化することが可能になり⁵⁾、ビジュアル化された情報をもとに支援を展開していくことになる。

支援展開におけるエコスキャナーの役割は、次のようにまとめられる。

- ①利用者の複雑な生活状況に関する多くの情報を整理・分析して保存
- ②収集情報をコンピュータ・シミュレーションにより有効な支援情報に処理・加工
- ③情報のビジュアル化により生活の変容を時系列で表示
- ④処理情報の活用で利用者の生活理解と課題解決への支援を推進

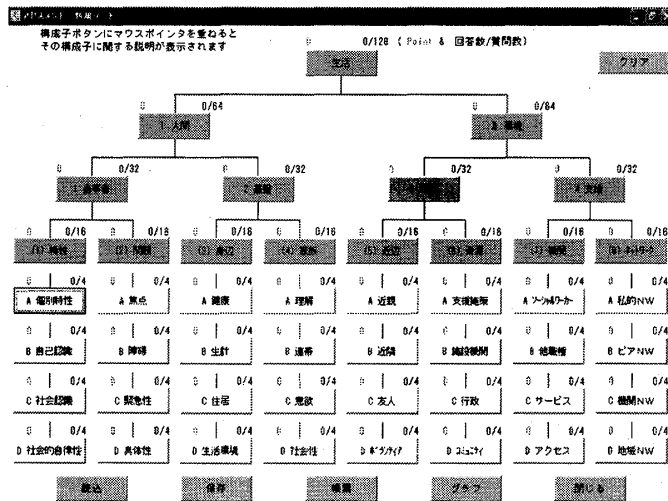


図5 アセスメントシート

図6 インタラクシート

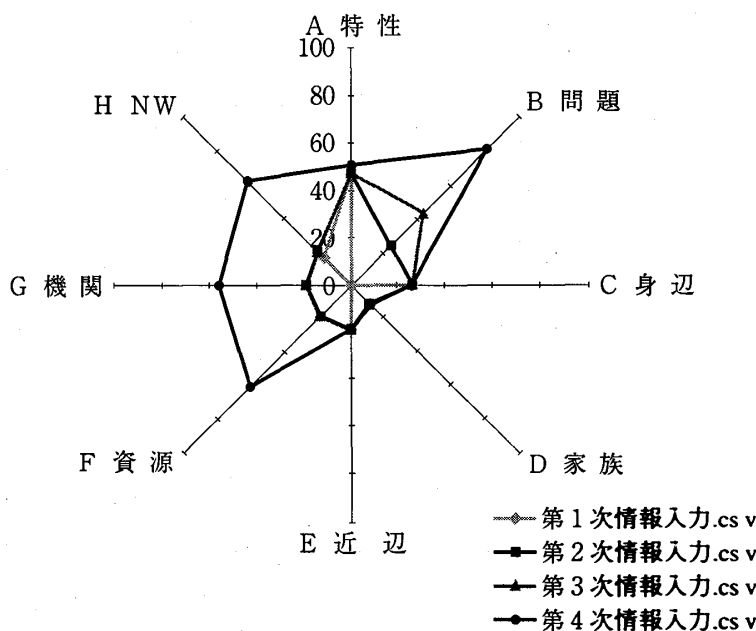


図7 生活情報のビジュアル化

⑤生活コスモスのビジュアル化から支援への参加と協働を促進

⑥エコスカナーを活用したコミュニケーションから実存的理解と自己実現への進展
など、エコスカナーを支援ツールとして活用することで、利用者の生活理解と支援への参加と協働を目指したエコシステム構想の具現化が期待できる。

支援スキルとエコスカナー

エコスカナーの活用方法については、主として利用者の生活支援への実践ツールとして解説してきたが、ソーシャルワーカーや学生の支援スキルの訓練にも活用できる。その場合に、ソーシャルワークの支援スキルとは、何なのかを考察しておかなければならない。支援スキルとは、クライアントを的確に認識し、その状況を把握・洞察し、理解することによって最適な支援を提供する行為⁶⁾を意味するものである。それは、面接技術などコミュニケーションへのノウハウそのものではなく、その前提となる利用者のありのままの生活を理解し支援するソーシャルワーカーの専門的な状況認識力・支援計画力・支援推進力である。

エコスカナーをスキル訓練に活用することで、複雑で固有な生活コスモスの状況について理解する方法をシミュレーショ

ンから体験することができる。エコスキャナーで情報を入力し、ビジュアル化された情報から生活状況の理解や支援の計画、さらに支援方法を検討し、支援過程の変容をみることで支援効果を評価することも可能である。そして利用者の固有な生活コスモスを理解し、支援への参加と協働の実践展開の方法を身につけることができる。

(長澤真由子)

Ⅳ エコスキャナーの特性

実践教育への支援ツール

近年のソーシャルワーク実践をめぐる理論と実践の乖離や不連続性には懸念されることが多い。理論が実践への有効な機能を果たさず観念化している一方で、実践が理論を反映した方法をもたないままソーシャルワーカーの勘と経験のみに依拠した実践が遂行されている現実のあることも否定できない。

このような状況から実践教育の目的には、理論と実践の架け橋になる意義や役割が期待されている。それは何よりも実践に活用可能な、理論に裏付けられた実践スキル⁷⁾を修得することにある。ソーシャルワークの実践教育の重要性が指摘されながらも、利用者の人権、スーパービジョン能力や経験をもつ有能なソーシャルワーカーの希少性、日常業務の繁忙性などから実践現場での臨床実習への門戸が、十分に開かれていない理由もある。

実践教育や現任訓練は、場面を変えた見学や実践教育演習として実施され、特に実践事例の検討が中心となってきた。もちろん事例研究の方法にもよるが、VTRでの観察学習や臨場感を欠いた事例考察のみで実践スキルの訓練が行われている問題もある。そこでの経験や学習できる実践スキルも自ずから限定されたものになってきている。

このような現状から、実践スキルの開発や訓練には、教材となる活用可能な方法や手段あるいはツールが試行錯誤で用いられるようになってきた。このような実践スキルの訓練に活用されるようになってきた教材やツールには、①利用者支援を目的にしたものと、②実践とスキル訓練を目的にしたものがある。前者の実践場面を想定したものには、ロールプレイや面接シミュレーション教材などが挙げられる。また後者の実践とスキル訓練の両方で活用可能な教材やツールとしては、子ども虐待ケース・マネジメント・マニュアルやエコマップ、エコスキャナーが挙げられる。

これらのなかでも、エコスキャナーは、実践とスキル訓練の両方で活用可能な多目的ツールであるところから、特に今回の実践スキルの修得と訓練に効果的であると注目されるようになってきた。

エコスキャナーと他のツールとの比較

そこで実践とスキル訓練の両方で活用可能な支援ツールであるエコスキャナーを含め、子ども虐待ケース・マネジメント・マニュアル⁸⁾と、エコマップ⁹⁾、の3つの支援ツールを比較することで、われわれが開発してきた多目的エコスキャナーの意義や特徴を明らかにしてみたい。

まず子ども虐待ケース・マネジメント・マニュアルは、児童相談所などの児童福祉専門職が、児童虐待に焦点化したケース・マネジメントの促進を目的にしたもので、援助手続をスムーズに行えるようにする教材である。次にエコマップは、1単位とされる家族を中心に、家族と周りの環境との人間関係や社会関係を描くことを通して社会的支援ネットワークをとらえようとする認識地図と

表2 各ツールの特徴

ツール名	ツールの特徴
子ども虐待ケース・マネジメント・マニュアル	①目的：子ども虐待へのケース・マネジメント ②焦点：課題状況の把握と援助方法の学習 ③手段：コンピュータ ④方法：課題ごとに設定された質問への回答、情報の入力
エコマップ	①目的：生活問題状況の把握、支援展開の方向づけの考察、記録、スーパービジョン ②焦点：利用者を中心とした周囲の環境との関係性の把握 ③手段：手書き記入 ④方法：図形と3種類の線による状態図の作成
エコスキャナー	①目的：利用者の生活コスモスの理解 ②焦点：アセスメント過程の重要性の理解、全体的視野からの支援の必要性の理解、エコシステム状況の理解 ③手段：実践訓練プログラムとコンピュータ ④方法：独自の実践訓練プログラム、128因子情報に関する質問への回答、シミュレーションによる状況・変容・過程のグラフ化

いえるものである。

表2は、3つのツールについての特徴を、①目的、②焦点、③手段、④展開方法、の4点に分類して比較したものである。各カテゴリーから、それぞれの特徴について考察してみたい。

まず、①目的ということでは、3つの支援ツールが実践とその訓練場面の両面で活用できるという共通点をもっている。②焦点になることは、エコマップとエコスキャナーが状況を理解するために重視な素材や情報の提供ができるという共通点をもっている。そして③手段としては、エコマップのみが手書きという手法を活用している一方で、他の2つの実践ツールがコンピュータを活用した情報入力という方法を用いている。また実践へのツール展開の④方法については、子ども虐待ケース・マネジメント・マニュアルとエコスキャナーが質問への回答入力という点では共通しているが、その目的や活用方法から質問の内容も異なれば、情報の処理方法もまったく異なる独自の方法で展開されている。

比較にみるエコスキャナーの特徴

また表2より、エコスキャナーと他のツールとの比較にみられる共通点については、①事例研究における活用、②コンピュータの活用、③ソーシャルワーク支援の対象分野を特定していないこと、④生活状況の把握、などの4点が挙げられる。厳密にはコンピュータ活用などで一部手書きのエコマップのあることも承知している。

他のツールとの相違点にみるエコスキャナーの特徴としては、①独自の実践訓練プログラムに基づくツール活用、②グループ・ディスカッションの活用、③思考枠組み理解の3点が挙げられる。

①独自の実践訓練プログラムに基づく活用方法と、②グループ・ディスカッションの2点については、この支援ツールが前提として一定の集団への研修を目的としていることが指摘できる。また、グループに分かれて研修を受けることから、グループ内やグループ間の生活状況の共通認識に加えて、グループ間の違いへの気づきを重視していることである。さらに、この気づきは、利用者とソ

ーシャルワーカー、あるいはソーシャルワーカー間の認識の違いと、その認識の違いを埋めていく方法をトレーニングすることにつながり、利用者との協働過程やソーシャルワーカー間の連携を展開する方法に多くのこと示唆してくれる。

そして最も大きな相違点としては、エコスカナーが他の2つの支援ツールよりも、③生活理解への思考枠組みを示唆してくれる点が挙げられる。これは、エコスカナーがソーシャルワーク実践での単なる how to 技術や技法の習得を志向しているのではなく、利用者システムと協働して行われるソーシャルワーク実践過程を展開する実践スキルの育成を重視しているためである。

(山口真里)

V エコスカナー活用の成果

エコスカナー活用によるトレーニング

エコスカナーは、①利用者支援方法、②教育支援方法、③事例研究方法、さらにこれらの④折衷的活用方法¹⁰⁾の4つを中心に場面に応じて活用できる。その活用目的は、エコシステム視座からの生活理解にあり、コンピュータを用いて、生活というエコシステム過程をビジュアル化してわかりやすく理解しようとするにある。この生活支援への視点が、ソーシャルワークの専門性であることから、エコスカナーは専門性を訓練するためのツールとして活用できる。特に教育場面で用いる場合は、ソーシャルワークの生活理解への実践スキルをトレーニングするために活用が期待

表3 トレーニングプログラム

時間配分	内 容
45分	ソーシャルワーク・アセスメント演習の主旨 二つのアセスメント方法（エコスカナーとエコマップの解説）
60分	第1次アセスメント入力 質問回答入力とグラフ作成，エコマップ作成 （グループディスカッション）
10分	休憩
25分	グループ報告（ツールを用いて報告） 課題Ⅰについて検討 ・エコスカナーとエコマップによるアセスメントの違いと共通点を確認 ・他のグループとの違いと共通点を確認
60分	第2次アセスメント入力 質問回答入力とグラフ作成，エコマップ作成 （グループディスカッション）
25分	グループ報告（ツールを用いて報告） 課題Ⅱについて検討 ・第1次アセスメントのグラフ，エコマップとの変化 ・エコスカナーとエコマップとの違いと共通点を確認 ・他のグループとの違いと共通点を確認
10分	アンケート記入
	終了

されている。

ソーシャルワークにおける実践スキル教育へのコンピュータ・プログラムが、まだほとんど開発されていない¹¹⁾と1993年に指摘されているが、それから10年が経過した今日でも、このような状態はあまり変わらないようである。そこで、エコスキャナーをトレーニング場面で活用しながら、その実践スキル訓練への検証と活用の成果について検討してみたい。

エコスキャナー活用によって訓練が期待できる実践スキルとは、主に①生活状況への理解、②生活の変容への理解、③生活コスモスへの理解であり、それらを通じて生活コスモスという利用者の生活する固有な世界を理解し、有効な支援を可能にしようとするものである。このような実践スキルの訓練を目的に、かねてよりエコスキャナーを用いた実証研究を継続してきた。それはオリジナルに作成したトレーニング・プログラムを用いて、事例を活用しながらのグループ学習である。情報をシミュレーションし、討議を深めアセスメントから利用者理解への視野や発想を培う演習ということになる。

目的は、利用者理解への実践スキルの訓練を目指したアセスメント・トレーニングである。内容は、①生活状況への理解について、事例を前半と後半にわけ、2回のアセスメントを行うこと、②生活の変容への理解については、2回のアセスメント結果を比較すること、そして、③生活コスモスへの理解については、他のグループ・メンバーとの比較や、グループ別での事例に登場する利用者とソーシャルワーカーそれぞれの立場からの比較考察することである。それは討議を中心にアセスメント課題に対する相互の結果報告と、質疑応答から、利用者の生活理解への知見と方法さらに支援過程の展開への実践スキルの学習を重ねるためである。

またトレーニングは、表3のプログラムで展開され、特に、アセスメント後に課題を設定し、トレーニング責任者がアセスメント結果を明確にできるようにまとめを実施する。同時に、エコスキャナー活用による効果を検証するためにアンケートを実施している。このプログラムを用いたトレーニングは、2004年7月から9月にかけて、3大学49名を対象に、大学教員と大学院生との4名が参加して実施した。またそこで活用したツールは、生活を具体的に理解できると考えられるエコスキャナーとエコマップであり、その比較からエコスキャナーの効果を検証したものである。トレーニングでは、3～5名のグループに分散して、エコスキャナーとエコマップのいずれかを選択してもらい、休憩を含む4時間の演習として実施した。

エコスキャナーを用いたトレーニング

エコスキャナーとエコマップは、生活理解のために、その把握状況をビジュアル化して整理することが可能なツールである。しかし、そのビジュアル化の方法は、それぞれで異なっている。エコスキャナーは、トータルな生活を人と環境からシステム化した要素ごとにコンピュータの情報処理機能を用いて図8のようにビジュアル化する。一方エコマップでは、当事者とその家族が社会資源とどのように関係しているのかを手書きにより作成し、図9のようにビジュアル化したものである。トレーニングでは、事例からアセスメントした情報に基づいて、それぞれ以下のようなビジュアル化した整理がされている。

このように、同じ生活状況把握のために実践場面で活用するエコマップと比較し、エコスキャナーによる実践スキル訓練への効果を検証した。検証は、グループによるアセスメント・トレーニング

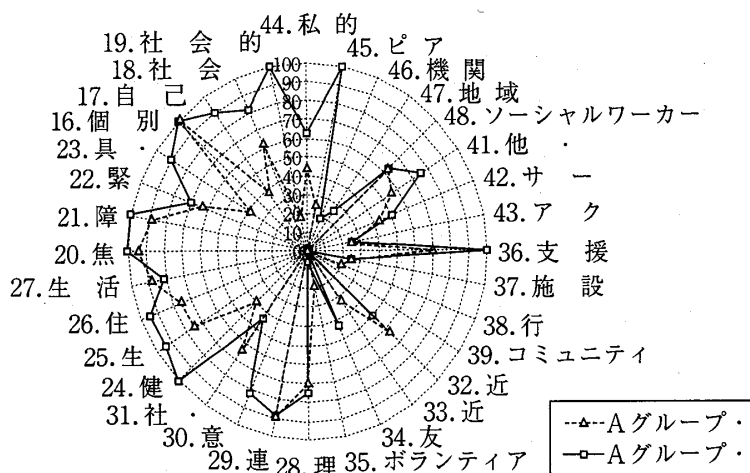


図8 エコスキャナー

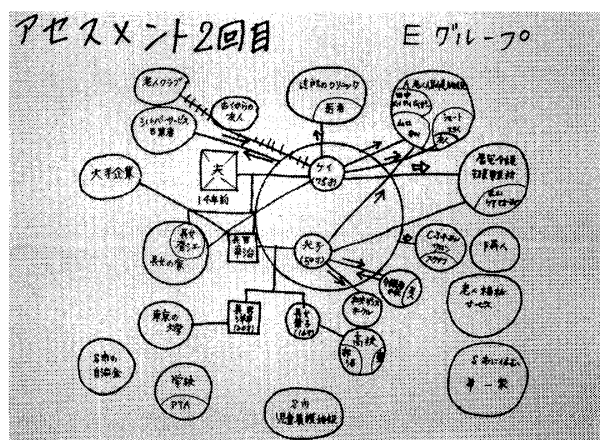


図9 エコマップ

グについて、①場面への参加と観察、②トレーニング課題の達成度、③実施者へのヒアリング、④アンケート結果分析の4点から評価した。これらの整理より、結果を表4のようにまとめることが可能である。

トレーニング成果の比較考察

活用ツール別にトレーニング方法の成果を比較してみると、実践スキル訓練へのエコスキャナー活用の効果は、①生活状況への理解、②生活の変容への理解、③生活コスモスへの理解の3点から整理すると、以下のことが特徴的に指摘できる。なおこれらについては、アンケート結果の意見も加えて整理した。

①生活状況への理解：生活全体の情報のなかに事例を位置づけて

表4 トレーニング特性の比較

	エコマップ	エコスキャナー
①	・事例に沿って具体的に描くことができ、容易さを感じていた ・家族関係や社会資源の関係を描くことができず困難を感じていた	・一般的な生活理解の質問項目に事例状況を位置付け整理することにじっくり取り組んでいた
②	・当事者の生活を、社会資源との関わりから整理した ・生活問題については、嫁一姑の葛藤が主であったためマップからは読み取れなかった	・当事者の生活を人—環境側面から、8項目ごとに整理した ・生活問題については、ツールから読み取ることができ、項目ごとに支援計画を考えることができた
③	・ソーシャルワーカーからの働きかけの図にしかない ・事例から得られる場面状況への議論が活発となった	・ソーシャルワーカーだけでなく当事者の立場からも入力できる ・事例から得られる情報をイメージする議論から始めることができる
④	質問：ツールを比較する演習では、その内容理解に効果的でしたか？ 回答：5. 効果的だった ⇔ 1. 効果的でなかった 平均：3.86 (エコマップ) 4.22 (エコスキャナー) 全体での平均：4.06 最頻値：4 中央値：4	

考えることができる、関係性だけでなく、当事者理解や社会資源の内容も把握できる。

①生活状況への理解

アンケート結果
質 問：ソーシャルワーカーの生活への視点を理解できましたか？ 回 答：5. よく理解できた⇔1. 理解できなかった エコスキャナー (ecoscanner) 群とエコマップ (ecomap) 群を独立変数とする一要因分散分析 (被験者間) ecoscanner : M=4.30, SD=.47 ecomap : M=3.81, SD=.93 $F(1,46) = 5.63, p < .05$

②生活の変容への理解：1次、2次アセスメント結果のグラフを重ねて表示することで生活の変容状況がよくわかる。

②生活の変容への理解

アンケート結果
質 問：ツール利用により利用者の生活の変容を理解できましたか？ 回 答：5. よく理解できた⇔1. 理解できなかった エコスキャナー (ecoscanner) 群とエコマップ (ecomap) 群を独立変数とする一要因分散分析 (被験者間) ecoscanner : M=4.74, SD=.59 ecomap : M=4.38, SD=.59 $F(1,46) = 4.36, p < .05$

③生活コスモスへの理解：項目が決まっており、他グループとの比較が容易であり、また当事者の立場からの入力も可能である。

③生活コスモスへの理解

アンケート結果
質 問：ツール利用によりソーシャルワーカー間の生活認識の差異が理解できましたか？ 回 答：5. よく理解できた⇔1. 理解できなかった エコスキャナー (ecoscanner) 群とエコマップ (ecomap) 群を独立変数とする一要因分散分析 (被験者間) ecoscanner : M=4.22, SD=.93 ecomap : M=3.62, SD=1.02 $F(1,46) = 4.53, p < .05$

以上のように活用ツールの相違から、エコスキャナーとエコマップとの特性比較は、表5のように整理することができる。それに対応させエコスキャナーの活用の成果を、次の6点にまとめて指摘することができる。

- (1) クリックするだけで生活状況を入力し、容易にビジュアル化できる。
- (2) 質問項目として思考枠組みが設定されているので、生活をトータルに把握できる。
- (3) 事例に即した質問項目でないために一問ずつにどのように理解したかを試行錯誤を重ねて深く議論できる。
- (4) 参加者個人やグループに思考枠組みの形成が期待できる。
- (5) ビジュアル化する項目が決まっており、他グループとの比較が容易である。
- (6) ソーシャルワーカーだけでなく、当事者の立場からの入力が可能である。

最後に、今後の実践スキル・トレーニングのためにも、エコマップ、エコスキャナー両方を体験したうえでの効果、参加者の習熟度別の効果、その他のツールとの組み合わせや、トレーニング段階・順序にみる効果の検証を行うことができれば、エコスキャナー活用の意義が立証できると思われる。そして、さらに実践への応用のために、支援過程に応じたエコスキャナーの活用や、そのフィードバックにより、改良を重ねながらエコスキャナーによるトレーニング方法を確立することが

表5 両ツールの特性比較

エコマップ Ecomap	エコスキャナー Ecoscanner
手書き作業	コンピュータ入力作業
図面作成に規則あり	インテークシートへの対応
比較的短時間	128因子入力時間に個人差
事実への議論	状況・変容・過程への議論
事例を判断して記入	質問に対応した選択肢入力
一面的状態像	実体のシュミレーション像
位置・関係の理解	生活のエコシステム理解
可視範囲の比較	多角・多面的状況の比較

今後の一大課題である。

(西梅幸治)

VI おわりに

これまで大学教員を中心に現場のソーシャルワーカーや大学院生たちで組織したエコシステム研究会の活動にて、①教育支援ツールの検討、②演習事例内容やプログラムの改良、③現場訓練や教育演習による実証研究などを実施してきた。今回の研究は、支援ツールとしてのエコスキャナーの実践訓練や教育場面での活用方法について、ソーシャルワーク演習で比較的良好に用いられるエコマップと対比しながら考察したものである。

エコマップの効用については、①ルールに沿って1枚の紙に当事者や家族と関係する資源が簡単に描けること、②家族と資源の関係性の発見や新しい資源の発掘に役立つことなどが指摘されている。エコマップというツールは、どちらかというと実践場面の整理やソーシャルワーカーの行動の振り返りに適している。しかし、エコマップによるスキル訓練の過程は、そのプログラムの活用や方法が限定されているところから、ワンパターンの傾向になりがちである。実践での活用には、まだ多くの問題を残しているいわねばならない。

一方エコスキャナーは、エコマップに比して①コンピュータによる情報整理という迅速性、②グラフとディスカッションを通じ、利用者や家族と専門家とで共通な情報を考察・共有できる可能性、③1次・2次とアセスメントの積み上げから変容状況を視覚的に理解できる利便性などの特徴が指摘できる。

エコスキャナーを用いた訓練や演習教育では、利用者の生活コスモスの考察に、事例とツールの質問内容とを関連づけてイメージ化することから、ソーシャルワーカーの利用者理解の基礎となる思考枠組みを形成したり、柔軟な発想力の涵養に役立つと考えられる。それは、学生やソーシャルワーカーに観念的に受けとめられてきた利用者の生活理解を、エコシステム視座から「生活状況の理解」・「生活変容の理解」・「生活コスモスの理解」として実感することを可能にし、各自が固有な方法やアプローチを考えるのに多様な視野や発想さらに示唆や指針を提供してくれる。

エコスキャナーによる支援スキル訓練は、訓練や教育者側の創意工夫から新しい課題の設定と、

習得すべき方法・技術や技法とを組み合わせることによって、多様な成果を期待することが可能である。そのためには、

- (1) 訓練・教育者側にエコスカナー活用への機会の提供と習熟
- (2) 事例と演習課題に照らし合わせたエコスカナーの実証研究の積み上げ
- (3) 研修や実践・教育現場でのデモンストレーションとエコスカナーへの関心と理解の喚起
- (4) これらのフィードバックから、教育支援ツールの定式化と新たな実践支援ツールの開発

などが、今後の課題である。

本教育支援ツール作成の経緯から得た成果を、さらに実践支援ツールの改良や定式化に生かしていかなければならない。本研究を通じて支援情報の整理や保存から活用・展開への実践的活用を確かなものにできたと実感している。それは、利用者との参加と協働のもとにビジュアル化された多様な情報を共有し、生活状況の認識や、課題追求への動機付けなどに科学的で有効な役割を果たせることから、比較的早い段階で実践への導入が可能だと確信している。

エコスカナーのような参加・協働タイプのツールは、これまでのソーシャルワーク実践教育にはほとんど登場してこなかったことから、実践教育方法の刷新や改革にも大きな貢献ができると考えている。

(中村佐織)

注

- 1) 太田義弘 1 「ソーシャルワーク実践研究とエコシステム構想の課題」『龍谷大学 社会学部紀要』龍谷大学社会学部学会、第20号、2002年、4-7頁
- 2) 太田義弘 2 「ソーシャルワークの臨床的展開とエコシステム構想」『龍谷大学 社会学部紀要』龍谷大学社会学部学会、第22号、2003年、103-109頁
- 3) 具体的なエコスカナーによる生活のシミュレーション方法、操作方法については以下の文献を参照されたい。
 - ①太田義弘 野澤正子 中村佐織「ソーシャルワーカーへの支援スキル訓練の研究／コンピュータ・シミュレーションを用いた実践教育の展開」『龍谷大学 国際社会文化研究所紀要』龍谷大学国際社会文化研究所、第6号、2004年、209-224頁
 - ②太田義弘 1, 前掲論文、7-13頁
- 4) 太田義弘 2, 前掲論文、6頁
- 5) 同論文、7頁
- 6) 太田義弘「ソーシャル・ワーク実践とエコシステム」誠信書房、1992年、11頁
- 7) 具体的なエコスカナーによる生活のシミュレーション方法、操作方法については以下の文献を参照されたい。
 - ①太田義弘・野澤正子・中村佐織、前掲論文
 - ②太田義弘「ソーシャルワークの実践研究とエコシステム構想の課題」『龍谷大学社会学部紀要』龍谷大学社会学部学会、第20号、2002年、7-13頁
- 8) この教育支援ツールの紹介(表1の作成も含む)については、以下の文献を参照した。
 - ・芝野松次郎編「子ども虐待ケース・マネジメント・マニュアル」有斐閣、2001年
 - ・芝野松次郎「児童・家庭福祉実践のイノベーション～実践モデルと実践マニュアルの究開発について～」『関西学院大学社会学部紀要』第85号、関西学院大学社会学部研究会、2000年
 - ・寺本典子「ケースマネジメントによる児童虐待ソーシャルワーク援助」『関西学院大学社会学部紀要』第85号、関西学院大学社会学部研究会、2000年
- 9) この教育支援ツールの紹介(表1の作成も含む)については、以下の文献を参照した。

- ・岡本民夫他「老人福祉サービスにおける事前評価とエコマップ—ソーシャルワーク実践図式化表示の試み—」『ソーシャルワーク研究』Vol.18 No.3 AUTUMN, 相川書房, 1992年
 - ・湯浅典人「エコマップの概要とその活用—ソーシャルワーク実践における生態学・システム論的視点—」『社会福祉学』第33—1号, 日本社会福祉学会, 1992年
- 10) 太田義弘 2, 前掲論文, 15頁
 - 11) Brett A. Seabury and Frank F. Maple, "Using Computers to Teach Practice Skills," *Social Work*, vol. 38, No.4, 1993, p.430.